

Ⅲ. 資 料

「東アジアにおける理想郷と庭園 に関する国際研究会」について

はじめに 「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」(以下、「国際研究会」という。)は、奈良文化財研究所及び文化庁の主催の下に、奈良文化財研究所文化遺産部を事務局として、平成21年(2009)5月19日から21日までの3日間にわたり、平城宮跡資料館小講堂において開催された。

この専門家会合では、東アジアの庭園史に関する重要な知見を共有するとともに、日本の「浄土庭園」をめぐるさまざまな見地からの検討を通じて、その本質に備わる顕著な普遍的価値を明らかにしたのみならず、東アジアの庭園史に関する包括的な研究において重要な一歩を標したと言える。

以下には、このような国際研究会に関して、開催の背景や趣旨、経過と成果の一部に関する概要を記し、今後の更なる研究の方向性を検討したい。

開催の背景と趣旨 奈良文化財研究所では、独立行政法人化後の中期計画に示された「古代都城遺跡に関連する庭園の調査研究」において、平成13年度(FY2001)以来、『古代庭園に関する調査研究会』を開催してきた。現在、第Ⅱ期として平安時代(8世紀末～12世紀末)を中心とした庭園に関する研究をテーマとしており、平成18年度(FY2006)から、宮廷の庭園、貴族邸宅の庭園などについて検討してきた。

平安時代の庭園を検討する上で、残された検討課題のうちでも、日本において10世紀から14世紀にかけて特異的に造営された「浄土庭園」の本質を見極めることが重要であった。そして、その本質を検討するためには、中国大陸及び朝鮮半島(韓半島)を通じてもたらされた理想郷の思想と庭園の空間構成に与えた影響、また、中国大陸や朝鮮半島(韓半島)における表現の類似点や相違点など、その発展の系譜について検討することが不可欠であったのである。

一方、日本を代表する浄土庭園である平等院庭園(世界文化遺産「古都京都の文化財(京都市・宇治市・

大津市)」の構成資産)や、「平泉の文化遺産」(日本の世界遺産暫定一覧表掲載資産の一つ)に見られる傑出した浄土庭園群など、検討の中心となるべき事例は、日本における世界遺産の取組とも関連が深い。

そのため、平成21年度(FY2009)の『古代庭園に関する調査研究会』においては、文化庁と協力・連携し、日本国内のみならず中国・韓国からも建築史・庭園史の専門家を招いて、東アジアにおける理想郷と庭園の系譜や特質を検討し、それぞれの事例の比較研究を通じて、日本の「浄土庭園」の本質、あるいは、その極めて重要な到達点を示している「平泉の浄土庭園群」の世界的見地からの価値などについて検討を行った。

国際研究会の組立と経過 国際研究会では、田中哲雄(前・東北芸術工科大学教授)議長の下、中国・韓国からの専門家2名と日本国内の専門家5名の、8名で円卓を構成した。また、平等院庭園及び平泉の浄土庭園群に関する詳細な情報提供のための地元専門家のほか、日本イコモス国内委員会、平泉に関する専門家その他の関係者、そして、田辺征夫所長をはじめとする奈良文化財研究所の研究員、計35名の出席を得た。開催に当たっては、2日間にわたる講演と報告、コメント、質疑応答によって議論に不可欠な情報を共有した後、3つの議論を重ねることによって検討を深めた。

なお、開催に当たっては、講演・報告・コメントについてそれぞれ日本語、中国語又はハングルで参照すべき資料を作成して、それらを事務局が取りまとめるとともに英語訳を準備した。さらに、会議における作業言語を日本語として、中国語及びハングルと日本語の間でそれぞれ2名、計4名の通訳者と1名の通訳コーディネータを配置した。これら、翻訳・通訳については、株式会社コングレに委託した。その組立と論点の概要は以下のとおりである。

最初に、田辺征夫(奈良文化財研究所長)による開会の後、円卓を構成する専門家の1人でもあった小野健吉(文化遺産部長)からは、国際研究会の趣旨説明、そして、田中哲雄議長からは、今回の検討における方向性に関する問題提起が示された。

そして、講演・報告・コメントが以下の標題と順番で行われた。講演Ⅰ『理想郷としての日本庭園の意匠と技術』（本中眞；文化庁文化財部主任文化財調査官）と講演Ⅰに対するコメント（尼崎博正；京都造形芸術大学教授）、報告Ⅰ「宇治に築かれた西方浄土への憧れ～平等院庭園～」（杉本宏；宇治市歴史まちづくり推進課文化財保護係長）及び報告Ⅱ「奥州に夢見た理想郷と庭園群～平泉の浄土庭園群～」（佐藤嘉広；岩手県教育委員会生涯学習文化課主任主査）と報告Ⅰ・Ⅱに対するコメント（仲隆裕；京都造形芸術大学教授）、講演Ⅱ「古代中国における庭園の発展および浄土と浄土庭園」（呂舟 LU Zhou；清華大學教授、中華人民共和国）、講演Ⅲ「楽園を象徴する韓国の古庭園、雁鴨池庭園」（洪光杓 HONG Kwang-Pyo；東國大學校教授、大韓民国）、講演Ⅳ「中国庭園の初期的風格と日本古代庭園」（田中淡；京都大学人文科学研究所教授）。

そして、これらに基づき、『人と自然－表現としての庭園』、『庭園における池－その意味の変遷』、『理想郷と庭園－東アジアにおける表現の本質と多様性』をテーマとして、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの3つのセッションで、それぞれ2時間余り討論を行った。なお、討論Ⅰ・Ⅱにおいては会場全体を含めて議論し、討論Ⅲにおいては円卓で検討し結論を取りまとめた。

2日目に行われた討論Ⅰ・Ⅱにおいて主に重点を置いて検討された論点は、その順番に、「庭園文化の基層を成す人と自然の関わり」、「庭園文化の伝播と発展」、「東アジアにおける庭園の表現」、「東アジアの庭園における池の意味」、「浄土の画像における池」、「浄土庭園における池と堂舎との関係」、「日本に展開した浄土庭園の特異性・希少性」、「平泉の浄土庭園群の代表性・典型性」であった。

3日目の討論Ⅲにおいては、これらの成果を踏まえて準備された結論に関する案文について具体的な用語や表現の取扱いを含めて検討が行われた。

国際研究会の成果 討論Ⅲにおいて検討については、『東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際

研究会』の成果について」とする文書にとりまとめられた。その構成は、「1. 目的」、「2. 論点」、「3. 結論」、「4. 主な参加者」である。

「3. 結論」では、東アジアにおける庭園を「中国から朝鮮半島及び日本へと作庭思想が伝わる過程で、各々の地域に固有の自然観とも融合しつつ、独自の発展過程を経て各国に固有の庭園文化として定着した結果、形成された文化的な資産である。」として、特に日本において形成された庭園とその文化に、仏の浄土世界を理想郷とみなし、それを具現する独特の「浄土庭園」(Pure Land Garden)の様式が含まれることに着目し、それらが有する顕著な普遍的価値を正当に評価するため十分考慮すべき3つの観点についてとりまとめた。

すなわち、最初に、国際研究会の検討において明らかにされた「浄土庭園」の定義を示し、次に、現時点では、中国ではそのような「浄土庭園」に関する遺構は確認されていないこと、また、韓国では浄土世界を表現した仏国寺の九品蓮池のような事例は見られるものの、「浄土庭園」の盛行した形跡が認められていないことが示された。そして、平等院庭園など数々の事例が示すように、日本において盛行した「浄土庭園」の中でも、平泉に見られる一群の「浄土庭園」は、その発展過程において最も典型的かつ代表的な事例として認められることが示された。

おわりに 今回開催した国際研究会では、日本における古代の庭園史においても最も重要な主題のひとつである「浄土庭園」について、東アジアという広い文脈の中で検討を行い、調査研究を進めて行く上でも極めて重要な成果を挙げることが出来たと言える。特に日本における古代の庭園史に関する検討においては、アジア大陸からの種々の影響と伝播の過程を明らかにすることが極めて重要であり、この度の成果が、アジア諸国における原初的な庭園の歴史に関する調査研究をより一層発展させ、ひいては、更にアジアの庭園史を世界の庭園史の中に緊密なる繋がりを以て位置づける一助となれば幸いである。

(平澤毅／奈良文化財研究所)